

### 三十一、金剛の真心

自力更生ということが叫ばれ始めてからここ数年、それに対照して、「他力本願」の文字が嫌悪すべきもののように使われ始めてきた。ひどいものになると、他力本願亡国とか、支那の他力本願とか、あわれ仏教の真隨を現わされた大文字も常識をもつて貶される無力を表現する文字として扱われ始めた。しかもそれが要路の大官とか、陸海軍の大將とか、一国の指導的代表的立場にある人の口から使われる。ご丁寧なのになると「なかんずく、仏教において一番この他力本願を説く」とまで言う。

幾百千年の間、使われてきた、精練された術語に、常識者流が考えて、危険であったり有害無益であつたりするような内容を含んでいるであらうか。

親鸞聖人の宗教は、あくまで他力本願の宗教である。他力本願の宗教とは、眞実信心の世界のことである。聖人信巻にいわく、

「故に眞実の一心是を『金剛の真心』と名く。金剛の眞心是を『眞実の信心』と名くと。

以上の文によれば、眞実の信心とは「金剛の真心」のことである。しこうしてかかる金剛の眞心は凡夫の貪欲瞋恚愚痴の心より発起するものにあらずして、如来の本願より発起するものであり、如来心そのものの廻向顕現するものなるがゆえに他力と言われるのである。されば、行巻の他力論において、「他力と云ふは如来の本願力なり」と断定せられたのである。

1

金剛の眞心。眞実信心に一点の濁りなく、清浄なる眞実なるがゆえに「眞心」と言われるのであり、このまごころは、無常の前にも亡びず、火にも毒にも滅せず、逆境にも順境にも失わず、ついに何によつても消失しないがゆえに「金剛」と喩えられるのである。「金剛の眞心」をにおいてほかに、他力本願の世界はあり得ない。

金剛の眞心を獲得することが日本国にとつて有害であらうか、無益であらうか。彼らの、いわゆる自力更生なる世界すら、この金剛の眞心なくして眞にあり得るであらうか。

この金剛の眞心こそ、人生の眞実生活の根底ではないか。

だが社会常識をして、他力本願の世界とは力弱きこと、無力なること、社会成就に不必要にして亡ぼすべき有害なるものと思わしむるに至つたのは、だれの罪であらうか。それは仏教者自体ではなかつたか。

絶対他力の世界を、相対他力と誤り、なんらの精進なく、自覚なくして、「この身このまま死にさえすれば極楽にまられる」といったような言葉として要約された、老人の気安め程度のものだとしてしまったのは、だれの罪であらうか。

普通言われるところの自覚がことごとく信心ではないが、信心は人間に与えられる究竟的自覚である。最高最深の自覚である。他力本願の世界は、深い自覚の世界で

ある。されば、聖人は、「智慧の念仏」「信心の智慧」と、智慧を問題とせられた。智慧とは、自覚における開眼である。

他力本願の世界において、自力は許すべからざる本罪である。自力とは、広大なる仏智を知らず、無蓋の大慈悲と一体とならず、疑惑をもつて生きることである。本仏に対する疑惑は、一切に対する疑惑である。弥陀の本願に対する無明は一切に対する無明である。如来に対する不徹底は、一切に対する不徹底である。

個我が、個我の欲のためにのみ動いて、その幸福のみを求めてつき通そうとする我のはからいを自力と言われるのである。「仏法は無我にて候」と言われるがごとく、他力本願の世界とは、無我の世界のことであり、自力の世界とは、金剛の真心なき貪欲瞋恚のみの世界のことである。

だが、真実に他力の信心に生かされる人は、自分で信心を持つているとは思わない。また無いから探し出そうとも思わない。有る無しを超えて、本仏に向かつて生き、本仏によつて生かされることのみ知っている。ちょうど、忠臣は大君のましますことをのみ知るように。

しかし本仏弥陀の招喚も、それは教主善知識の教えを通して聞くのであるがゆえに、信心の行者は教えの前に無条件である。われに対して教えを説きたもう善知識は、如来の真実そのものに生かされて、われよりも先に金剛の真心に住したまい、われに対して説きたもう教えには、微塵の私心、自力を加えたまわず、それゆえにただちに弥陀の直説として受け得る教えを説きたもうのである。されば、教えに向かつて感動する心すなわち本仏の願意に感応する心である。

われらは聖人のみ教えを聞く時、一言一句の聖語の上に弥陀の直説という感銘を持つ。弥陀の直説とは、まったく真実そのものであつて、一点の私心なきがゆえである。私心なき真実に生きたもうがゆえに、その言々句々にも私心なく、万世、人を動かすのである、教えの上に弥陀の直説を感じるもののみ、よく金剛不壊の一道を行く。

真心のみは、時を超え、処を超え、人を超えて、いつでも、どこでも、だれの上にも輝くものである。しこうして念仏の人は、今、ここで、私の上に生きたもうを感じるのである。

真心とは南無阿弥陀仏である。

真心こそは、一切の時と処とを越えたるものなるがゆえに、諸行無常を超えたるものであり、栄枯盛衰など、生死動乱、紛々たる雑音を越えたるものである。それ自体、大経の「建立常然無衰無変」である。ゆえに真心のみを金剛と言われるのである。

されば、金剛の真心に生かされる者もまた、生死動乱を超えて、生かされてゆく。眞実なる生活は永遠に絶対他力である。

人間の心は、恐るべきとても多くのものを持っている。暴力を恐れ、権力を恐れ、誤解を恐れ………しかしながら、念仏の世界において、ほのかにわれらがつまらぬものを恐れていたことを知らされ、ほんとうに何を恐るべきかを知らしめたものである。真に恐るべきは、眞実なきわが心であり、眞実に叛くわが心である。

人は安らぎを求める。しこうして眞の安らぎは、ただ金剛の真心のうちにのみあり得る。

人は力強さを求める。しこうして眞の強さは、ただ金剛の真心のうちにのみあり得る。

たとい一時はどんなに栄えるように見えても、真心に生えぬかないものは、必ず滅ぶ。貪欲、虚偽、策略、才幹などは一時の栄華を得れば、それによつて甘えて、道理を無視するがゆえに、栄えることによつて、かえつて墓穴を掘るに至る。

真心にして金剛にあらざるものは、眞の真心にあらず。弱き善人は、悪人に等し。

金剛の真心あるかに見えて怪しきものは、これを試すに「名利を失わしむるぞ」とおびやかすに限る。必ず、眞実ならぬものは、尻尾を出して、その歩み抽象的となり、妥協的となり、いつのほどにか姿をかくす。

眞実、如来に生かされるもののみ、一貫する。

淳、一、相続は、金剛の真心の三相である。一心そのものの真相である。

淳心、一心、相続心の三心が眞実信心の相であり、この三信を具することによつてのみ、念仏が如実に、破闇満願することを教えたもうたのは鸞師であつた。

金剛の真心は、淳心である。淳心とは、「厚朴」の心と釈せられる。てあついである。真心は必ずてあついである。それゆえに人が動くのである。厚の反対は、「薄」である。軽薄であり、浅薄である心は、信頼のおけるものではない。力になるものではない。朴は、質樸で、飾りのないことである。うわべだけの飾りがなくことである。尊いもの、眞実なるものは、それ自体光つていて、上に塗つて飾るを要しない。淳心は内から光る。自然に輝く。それ自体美しく莊嚴されてゆく。

淳とはまた、醇でもある。酒のまじりけなきものを醇といわれるのである。まじり気なき心、それが淳心である。至誠とは、まごころとは、純なる心、まじりけなき心のことである。存するがごとく亡ずるがごとくなるのは、不淳であるからである。まじりものがあるのである。

いかに学力があらうと、才幹があらうと、肩書があらうと、不淳な心の持主に力はない。天地を感動せしめる力はない。したがって不淳な心はその人を救いはしない。であるから、その不純な心は淳一にせられなくてはならない。鉱物を純粹にするのは、これを幾千度の高熱の溶鉱炉に入れて、これを熔かす。熔かす高熱が不純分をのぞく。六字の溶鉱炉の中で融かされてのみ、一切煩惱は転じて、淳心となる。金剛の真心は、仏凡一体の溶鉱炉の中にのみあり。

されば淳心は、決定心となる。天にも地にも、雨にも風にも、ついに、如来心さながらの一心となる。一心決定の心なるがゆえに淳心と言われるのである。

いかなる弱い人をも真に強くする道がある。一心の人にすることである。いかなる暗い人をも明るくする世界がある。一心の人にすることである。一心決定して金剛の真心に住して、なお、暗いという人を知らず。

淳一なる心は、必ず相統する。

相統しないところには、いかなる尊いものもあり得ない。悪逆といえども、時に善を行うことあり、凡夫といえども、時に感動することあり、相統せず、余念間つがゆえに、中斷するがゆえに、龍頭蛇尾に終るがゆえに、ついに何もものもないのである。されば事のいかんは、相統のいかんにかかわる。

相統するものは必ず大成する。

念仏相統するものは、必ず理想の浄土に至りて成仏する。

一貫相統せざるものは、決定心を得ない。一心決定は、相統の人にある。一心相統するものは、至誠淳心である。されば、相統するものは、金剛の真心である。

親に対して淳一相統すれば孝であり、大君に淳一相統すれば忠であり、善知識に対して淳一相統すれば「順」である。本仏に対すれば「信」である。しこうしてかかる一切の道は、ただ、まごころによつてのみ成就する。

金剛の真心の世界、それは大地に生を受けたものが、その人間に与えられた領域の限りにまで、宗教的自覚の世界を掘り下げた時、開けてくる世界である。

だがそれは、その人の聞いた教えの深さによるのである。たとい、その人が、何学博士であらうと、何道の達人名士であらうと、それでは至り得ない世界である。そしてそのことは、現代の知識階級が、哀れな迷心の世界に踊ることによつて、それを立証してくれた。真実の教えを聞かぬかぎり、あらゆる人は、自分の問題も、家庭、社会に対する道も、とことんまで究竟することなくして、今日一日を過ごしている。重い問題を持つたままで。

ここにまた、年の暮が来た。去りゆく年の悲しきを思いつつも、われらはまた限りなく、大無量寿経の真実教を聞きがたくも聞くことを得、聖人の法流を汲んで、ほのかに、しかし明らかに、この金剛不壊の真心の天地に帰入せしめられたことを喜ばず

にはいられない。世の多くの人が、これを求め、これを聞く縁に恵まれず、求める気  
さえなくて、闇にさ迷う相を悲しみつつ、合掌して一切三宝の前に念仏する。